

目の前に、期待に目を輝かせた男がいる。

恥ずかしいというより、気まずい。目線をうろつかせて少し身を引くと、同じ分だけ迫られる。

「……近すぎ。もっと離れてよ」

「ええ、嫌や！ 一生に一度しか見られへん篠原の裸やで？ 絶対忘れんよう目に焼き付けたんねん、あ、写真撮ってええなら離れるけど」

「いつ、いいわけないでしょ、バカ……！」

んはは、と冗談っぽく笑っている男にひとつため息をつく。

覚悟を決めてぶち、とボタンを外すと「うおお……！」とかいう、バカみたいな歓声が聞こえて頭が痛くなった。

……なんでこんなことになったんだっけ。

たった数時間前のことなのに、遠い昔のことみたいに思える。あんなこと言わなければ、こんな恥ずかしいことになってないのに。

あの時私はあるうことか、この目の前の男に——私の裸でもいいのか、なんて言ってしまったのだ。



メロい関西弁の同僚に

からかい半分で

「裸見る?」と言ったら

本気になられて

触るのはダメって言ったのに

おまんこ舐められて

口説かれながら

ガチイキしちゃう話

ろくもいふさき

絢辻 透

空のジョッキがカタリと音を立てる。

だいぶ酔いが回ってきたみたいだ。居酒屋特有の喧騒もどこか遠くに感じる。

「なァ、聞いた？ 篠原の同期のオカザキさん、いつも来る配達の兄ちゃんと付き合うたらしいで」

「知ってる、ていうか私がくっつけたみたいなもんだし。いいよね、マツチヨのイケメン」
「え、篠原もやっぱマツチヨのイケメンがええん!？」

「そりゃ、マツチヨのイケメンが良くない訳ないでしょ」

広めのカウンター席の隣に座り、ハイボールを傾けながらこちらを覗き込んでいるのは、わたしの同僚の、西浦 謙太（にしうら けんた）という男だ。

大阪支社の営業部から転動してきた数個年上の男だが、ちょうど私が営業部へ異動した時期と被ったため、ほとんど同期のような存在になっている。

「篠原篠原、隣見て？ マッチョのイケメンおるで」

「え、なにに、どこ？ わかんない」

「目エ見えてへんの！？ 今ホラ、目の前目の前！！」

「目の前には精々細マッチョの意地悪なヤツしかいません〜ん」

「何を意地悪したんや俺が、いっつも優しいやろが！」

「私のお弁当がレンジで爆発四散したときに死ぬほど笑ってました〜」

「んははは！ いやアレはほんま、腹よじれるくらいおもろかってん、ははっ」

思い出し笑いをして震えている肩を勢いよく小突きながら、ちらりと顔を覗き込む。
笑っているのが真顔だろうが、絵になるほど整った顔が憎らしい。

（まあ、マッチョのイケメンではあるけどさ……）

肩を揺らして笑う度に、栗色の髪がふわりと揺れる。

少し目尻の垂れた大きな目と、それを引き立てるかのような泣きボクロ。運動好きで引き締まった身体と、どこに居てもすぐに見つけることができる恵まれた背丈。

見間違えようもないイケメンであることは確かだが、社内の誰も彼も皆、その形容詞の前に「黙っていれば」を付ける——西浦謙太とは、そういう男だった。

「言うてあん時、俺の常備のカップ麺で事なきを得たやろ？」

「……まあ、ね。一緒に掃除もしてくれたしね」

「んはは、めっちゃくちゃ綺麗なって逆に有難がられたやんな」

あの時、爆笑しながらもカップ麺を差し出し一緒にレンジを掃除してくれた西浦の存在は、確かにありがたかったな、なんて思い出す。

雰囲気反して気の回るこの男と、二人で飲みに来たのは随分と久々だ。

週末はよくこうして一緒に飲みに行く仲ではあるが、大体いつも他の同僚たちもいて騒がしい。

今日は珍しく誰も予定が合わず、いつもは人数が多くて行けない駅前のこぢんまりとした居酒屋に二人で行ってみる事になった。

「——それで？ 西浦は作らないの、彼女」

「作れるもんならとっくの昔に作っとるわ。まあ、その、なんや……好きな奴はおるけどな、全然うまくいかへん。お陰で毎日寂しい夜過ごしてんねんで」

カウンター席の小さな椅子に収まりきらない広い背中を丸めながらちびちびハイボールを飲んでゐる姿がなんだか侘しい。

こんなイケメンがうまくいかない相手ってどんな人だろうか。昔は私もコイツに惚れたのにな、なんてどこか感慨深くなる。

「なにそれ、欲求不満ってこと？」

「まあ、それもあるわ、もう最近画面の向こうのエッチなお姉ちゃんとか向き合ってへんもんなあ。人肌恋しくてかなわんで」

「画面の向こう……生で裸とか見たいってこと？ 風俗行けば？」

「いや！ 風俗とかはちゃうねん、仲良え奴とそうなりたいんやって！」

駄々を捏ねるように唇を尖らす西浦にひとつため息が出る。

いつもよりほんの少し、強めの酒を飲んだからだろうか。最近前にも増して距離が近い

この男にちょっとした意趣返しがしたくなった。

横目でちらりと盗み見る。

「ふーん……仲良い奴と、ねえ」

「そうや、こう、互いのこと知って、どんな話も出来るよおなった相手にようやく見してもらう、がええねん、俺は」

「じゃあ、私の裸でもいいんだ？」

「へ」

蜂蜜色の瞳が大きく見開く。私だからいいものの、どうとも思っていない相手に勘違いされて困るのは西浦自身だ。好きな人がいるなら、尚更。

そう思って吹っ掛けるように顔を覗き込む。

「私、西浦と仲良くってどんな話も出来ると思ってるんだけど。違うの？」

「……違わへん」

「じゃあ私でもいいじゃんって話になるでしょ。あんたさあ、好きな子いるなら、そういう

言い方氣を付け——」

言い掛けた言葉を遮るように、テーブルに置いていた手に突然、大きな手が被さってくる。

驚いて顔を上げると、今まで見たこともないほど瞳を煌めかせた西浦が居た。

「ええよ、いい、いい。篠原がいい！」

「はっ？」

「うわほんまか、嬉しすぎるわ……え、いつ見せてくれるん？ 今から？ え、もう今からにしよう、明日から連休やしちょうどええやろ」

「ちよ、あ、あんた好きな子は……っ！？」

「何やもう鈍い奴やでほんまに、すんませんおあいそお願いしますわー！」

店内の端まで響き渡る大声で店員を呼ばれて何も言えなくなる。

会計待ちの間、スマホを操作しながら「篠原篠原、こっから5分のホテル、スイートルーム空いとるで！」とこれまた大声を出す西浦の背中をバシン！と叩くことしかできなかった

た。

——最悪だ。

何が楽しくて、こんな男に裸を見せなきゃならないのだろうか。

よりにもよって、昔好きだった——そして告白する前に諦めざるを得なかった、この男に。

見せるだけ。

触るのはダメ。

もし触ったら、二度と口聞いてやんない。

三つの条件を西浦は、針を飲むような顔をして頷いた。

「ね、ねえ、ほんとに近いつて……!!」

「やって綺麗やから、篠原の肌。白くてすべすべやん、なんかケアとかしとるん？」

「そりゃ……スクラブとか、保湿クリーム塗ったりは、してるけど……っ」

「そんなら尚更よお見んと勿体無いわ」

いつもは快活で大きな声音が、ほんの少しトーンを下げて甘く響く。

あまりにも西浦が近付くから、せっかくの広いベッドなのに壁際に追いやられてしまった。

のろのろとシャツを脱ぐ私の目の前、西浦は膝をついて壁に手をつき、限りなく近づきながら胸元を見つめている。

「は……顔真っ赤にしながらシャツ脱いどるん、めちゃくちゃ興奮するわ……」

「う、うるさ……っ」

「ええ匂いするなあ、クリームの匂い？　これ。それとも篠原の匂い？」

「知らないっ、うるさいっ、もう喋るの禁止、嗅ぐのも息すんのも禁止……っ!!」

「死ぬやん、無茶苦茶言いなや」

ふ、と柔らかく笑われてまた全身が熱くなる。

限りなくゆっくりとボタンを外していたが、もう外すボタンがなくなってしまった。恥ずかしさで小刻みに震えながらシャツを肩から落とす。

「華奢やなあ、篠原、肩ほっそくて折れてしまいそうや。って……え、仕事でもそんな可愛ええブラつけとるんや……？」

「ふっ、普通だって……！ それにこれは別につ、そんな、特別なやつじゃ……」

「特別な奴もあるん！？ うわ、それも見たい……」

「今日だけって言ったでしょうが……！」

もうキャミソールの隙間からブラジャーがほとんど見えてしまっていて、恥ずかしがる意味もない。一思いに腕を上げてキャミソールを脱ぐと、また「うおお……！」と声がかかる。頭が痛くなった。

ストリップショーか何かだと勘違いしていないだろうか、この男は。

「もう、自分で脱ぐの嫌んってきた……」

「……そんなら、俺脱がしたるか？」

「っ……、……」

ぐっ　と喉が詰まる。

正直言っ　てそ　ちの　方　が　楽　な　気　が　し　て　き　た　け　れ　ど、　　頷　く　勇　気　は　な　い。

「……て　い　う　か、　あ　ん　た　が　そ　こ　に　居　た　ら　脱　げ　な　い　ん　だ　け　ど」

「ん？　　も　う　ち　よ　い　前　来　た　ら　え　え　や　ん」

目　の　前　に　西　浦　が　居　て、　後　ろ　は　壁　だ。　背　中　の　ホ　ッ　ク　に　手　が　届　か　な　い。

飄　々　と　笑　顔　を　見　せ　る　西　浦　の　裏　の　意　図　が　分　か　っ　て　た　め　息　が　出　た。

「あ　ん　た、　私　を　自　分　か　ら　胸　押　し　付　け　る　痴　女　に　さ　せ　る　気　で　し　ょ」

「い　や　っ、　い　や　い　や、　痴　女　な　ん　て、　な　あ？　　エ　ッ　チ　で　可　愛　え　女　や　な　　思　う　だ　け、　う　お　っ　！　？」

どすん、と無駄に逞しく筋肉のついた胸板に頭突きする。少しはよろめくかと思ったのにびくともしなくて悔しい。

とはいえ身体を前に倒したことで、背中と壁に隙間が出来た。腕を差し入れてブラジャーのホックを外す。

「ふん。エッチでも可愛くもないっつの」

「……篠原ア」

どうだ、とばかりに得意げな声を出すと、小さなため息と共に名前を呼ばれた。そんなに関心痛かったかな、と思って顔を上げると、間近に整った顔が迫って喉がひゅつと鳴る。

興奮しきった視線と共に、栗色の柔らかな髪がふわりと額にかかった。

「あんな……頭ぼすんって預けてブラ取って得意げな顔しとるん、正直めっちゃめっちゃ可愛ええからな？」

「はっ？ 何それ、あ、ちょっと、触るの禁止……！」

「触ってへん、ブラ取っとるだけや。それに篠原、脱がしたろかって聞いたんに黙っとったやん、脱がされる方が楽なんちゃう？」

—— いちいち鋭くて腹が立つ。

肩にぶら下がっていたブラ紐を取られ、するすると腕から抜かれてしまう。慌てた私はうっかり、自分から西浦の手を掴んでしまった。

待ってました、みたいな勢いで掴み返され、そのままあっさりとベッドに倒される。慌てて露出してしまった胸元を手で隠した。

「ちよっ—— ねえ、ダメって言った……！」

「篠原から触ってきたんやん、ノーカンや。な、裸見せてくれるんやろ？ そんなら下も脱がなあかんけど、自分で脱ぐのめっちゃめっちゃ恥ずかしいんちゃう？」

「そっ…… れは、そうかも、しんないけど……っ」

「ならええやん、脱がしたるて。触るわけやない、服脱がすだけ。な？ 自分で下まで脱いで痴女になると、俺に任して脱がされるん、どっちのがええか、賢い篠原なら分かるやろ」

言い聞かせるように囁かれて判断ができない。

胸元を両手で隠したまま、ぐっと唇を噛むと、許可と取ったらしい西浦が私のスラックスの留め具に手をかけてきた。

「ふ……どーしても嫌やったら蹴っ飛ばしてええから。ま、そんな時は自分で脱いでもらうけどな？」

「さ、さいあく……っ」

八方塞がりだ。結局蹴飛ばす勇気がなくて、されるまますると脱がされていく。律儀に肌には触れてこないのがまた腹立たしい。

「篠原、足も綺麗やんな、すらっとして。パンツスタイルよお似合う」

「それは……動きやすいし……。男はスカートのがいいんじゃないの……？」

「そんなん好き好きやろ。俺はズボンも好きやで、恰好ええやん」

こんな時にもさらっと褒めてくる所は本当に狡い。

思えば出会った時から、やたらと細かい所に気付く男だった。自然に褒めるのが上手くて、それ故かコミュニケーション能力も高く、ぐんぐん営業の成績を伸ばして。

負けないように、見た目だけでも仕事が出来そうなパンツスタイルを選んでいたけれど……今はもう、それも脱がされてしまった。

「パンツもブラとお揃いやん、可愛えなあ……」

「っひゃ……へ、変なことしないでよ……っ！」

指で縫い目を辿られてくすぐったさに身体がビクつく。もうこれ、触られているのと何が違うのだろうか。

いい加減蹴っ飛ばしたくなってきた、と思った瞬間、両端を握られてするする……っ♡と脱がされてしまう。

——やばい、待って、恥ずかしい。

「……に、西浦、待って、やっぱダメ、もう終わり、恥ずかしい……！」

「ふ……可愛ええなあ、なんも恥ずかしいとこないで、綺麗な身体やん。ちゃんと見してや、篠原」

気付けば声音がひどく甘い。身体中あちこち熱っぽくておかしくなりそうだ。

胸元を死守したまま上にずり上がって逃げようとしたら、追いかけて身体を足の間に入れられた。

「ねえ、ほんとにやだ、恥ずかしいってば、もうやだ……っ！」

「恥ずかしいんなら下はええん？　篠原、さっきから胸だけ隠してまんこ丸見えやで、エツロいなあ……」

「あ、えっ……?!　ばっバカ、ちょ、どいてよ……っ」

足の間に入っている篠原が屈む。何もつけていないそこをじっと見つめられて、なぜだかぞくぞくと背筋が戦慄く。背中がベッドボードについてしまっただけ以上逃げるできない。

もう蹴っ飛ばしてやる、と思って足を持ち上げたら、その瞬間、ふっっっ♡　と息を吹

「んああっ!?!♡ バカ、バカっ、駄目だって、ば、ああっ♡ や、やっ~~~~♡……♡♡♡」
「っ、ん……口ばっかやなあ、篠原、まんこは嬉しそうにばくばくしとるで……?」
「ちが、ちがうう、っひい♡ あっ、あっ♡ それやだ、ばか、すうなっ、ああ♡ むりい……っ♡」

ちゅぽ♡ ちゅっぽ♡
こりこりこり……っ♡

吸い付かれてぴん♡ と勃ってしまったクリトリスを飴玉みたいに吸われて背筋が仰け反る。必死に吐き出す言葉はどれも甘さが混じってしまっただけ全然覇気がない。

せめてものの抵抗をしたくて、震える手で柔らかな髪の毛を掴み、頭を押すと、股に顔を埋めたままこちらを見る視線とかち合った。

「……んはは、可愛えおっぱいやっと思えたわ」

「!?! なっ……に、言っ、んんっ♡ も、くち、はなしてっば、ああっ♡」

露出してしまった胸を慌ててまた隠したせいで抵抗もままならず、また舌を出されてこ

りこり♡ ぬりゅぬりゅ♡ とクリトリスを舐められて、押し寄せる快感に引きつった声が出る。

（うう……っ♡ ぬるぬるの舌で先っぽ舐められるの、むり……っ♡ なんでこんな、気持ちいいの……！ ダメなのに、蹴らなきゃいけないのに、クリ舐められる度力抜ける……っ♡ ああもう、そんな、欲情しきった雄丸出しの顔して舐めんな、バカ、バカ、バカ……っ♡）

「ふは……眉寄せて真っ赤な顔でじいっとこっち見て……かあわええなあ、篠原。もっと激しいのがええん……？」

「ちがつ、んあつ、あ、あ♡ や、やつ、うう……っ♡」

れろれる♡ ちゅぽ♡ ちゅっぽ♡
くりゅくりゅくりゅっ♡♡

宣言通りに激しくされてしまつて目の前に火花が散る。こんなの絶対ダメなのに、気持ちいいのでいっぱいになって、浅ましくへこへここと腰が揺れる。

必死に逃がそうと呼吸を繰り返すけれど、動きが止まることはなくて、逃がす以上の快感が襲ってくる。

「ひ、うづっ♡ ふー……っ♡ ふー……っ♡ んんう……っ♡♡」

「はは……気持ちええんやなあ、篠原。息ふうふう吐き出さへんとあかんくらいクリ好きなんや？ 吸う度マン汁溢れてきてとろとろやん……エッチで可愛え篠原のクリ、いっぱい吸うて、ペロの先っちょで撫でたるからな……♡」

（……っもうやだ、クリ好きなのバレてるの無理、絶対自分で触ってるのもバレてる……！♡ 恥ずかしくてやなのに腰動いちゃうしっ、早く蹴っ飛ばさなきゃいけないのに、でも、でも——でも……っ今、やめられるのも……やだ……っ♡）

ちろちろ♡ と、舌先で遊ぶみたいに舐められて焦れたさに奥歯を噛む。

早くこの熱を沈めて欲しい。思わず、ぎゅっと目を瞑り、くい……♡ と腰を上げてしまふ。

「くうう……っ♡ にし、うらあ……っ♡」

「……ふ、自分からまんこ差し出して、舐められ待ちしてんのエロすぎやろ。ちゃんと欲しがれて偉いなあ、いっぱい舐めたる……♡」

ぢゅる……っ♡

れくくっ♡ れくくっ♡

こりゅこりゅこりゅこりゅ♡

西浦の唇がまたおまんこに吸い付いて、裏筋を甘く舐め上げては、転がされる。気持ち良さで何も考えられない。

それ好き♡ ってするみたいにゆらゆら腰が揺らめいて、絶頂感を追いかけていく。

「あっ、あっ♡ うう……っ、ん、ふうう……っ♡ っく、ひ……っ♡ くくっ、にし……っ、にし、うらあ♡」

「んむ……、なんや？」

「く……っわ、私……も、イ、きそ……、っひ、あぁっ♡」

恥ずかしさに口籠りながら呟いた瞬間、ぱくっ♡ とクリトリスを食べられてしまった。
伊ってええよ、って言うみたいになっちゃう♡ 吸われて先っぽを舌先でこりゅこりゅ♡ ほじられてしまう。

あまりの快感に縋るものが欲しくなって、未だ律儀にベッドに置かれたままの西浦の手を恐る恐る握ると、優しく指を絡めて握り返された。

「ふ……篠原、このままイけそ？ 先っちょ好きやんな、吸ってペロで転がすと腰びくびくしとる……」

「ん、ん、いき、そ……っ♡ あ、あっ♡ にしうらあ、それ……っそれえ、きもち、い……っ♡♡」

こりゅこりゅこりゅ♡

れろれろれろ♡ ちゅうう……っ♡

もう虚勢も張れない。気持ちいいしかわからない。ぎゅ……っ♡ と甘えるように手を握って、絶頂の予感に足先がピン♡ と伸びていく。

「ひ、ああ、あっ♡ イく、にし、にしうらあ、もおイぐうっ♡ うあ、あ、……」

びくびくびくんっ♡

びくっ♡ びく……っ♡ がくがくっ……♡

自分でしたときとは比べ物にならない絶頂感が襲う。震えと共に全身の力が抜けて、握っていた手も離れていった。

ほんの少しだけ、どこか放り出されたような寂しさを感じていると、肩に手が回ってきて、ぎゅう……っ♡ と、抱き締められてしまった。

「はっ、ふ……っあ？ あ……っだ、だめ、さわるの……きんし、」

「……うん、ええよ、口きかへんで」

「なにそれ、約束の意味、ない……っん、う……っ？♡ ちょ……っつと、もお、無理だつて……！」

ちっとも力が入らない身体を抱き寄せられて首筋に口付けられる。

まだ終わらない気配を感じて慌てて背中をぺちぺち叩くと、さっきからずっと見ないようになっている西浦と目が合ってしまった。

——口数が少ないせいもあるだろうか。

整った顔が熱っぽく染まっていて、見たこともないほど真剣で、色っぽくて——心臓が、ぎゅうっと締め付けられる。

「篠原」

「っな、なに、」

「好きや」

「……は……っ？」

いつもうるさい口が、たった一言を甘く告げた。

——何こいつ。何なの、だって私、知ってるのに。こいつが、私のこと好きになるわけないって、ずっと前から、知ってるのに。

「あ、あんたね、やりたいからって適当なこと言わないでよ……っ、ちょ……!!」

「アホ、本気に決まっとるやろ。好きな奴のこーんな可愛いとこ見せられて触るん我慢できる男おらんわ」

「何それ、す、好きな子って、他にいるんじゃないの……!?!」

「そんな篠原のことに決まっとるやんか」

とさりと押し倒されて、真っ直ぐな視線に射抜かれる。

冗談を言ってる気配はないけれど、信じられない。混乱しているうちに、胸元にちゅ♡とまた口付けられた。擦ったさにふると震える。

「ひゃっ……も、ねえ、約束と違うってば……!」

「うん、ごめんな。篠原可愛すぎて、我慢出来へんかった」

「……っな、なにそれ……っあ、ちょ、……んん……っ!」

さっきから肩をぐいぐいと押しているのにびくともしない。力が入らないのは確かだけれど、こんなに敵わないなんて。

結局両腕とも取られてベッドに縫い付けられてしまった。

ちゅ♡ ちゅ♡ と首筋にも胸元にも何度となく口付けられて、恋人みたいな触れ方に、また腰元が疼いていく。

「篠原、口きかんでええから、声だけ聞かせてや」
「な、に、言って……っあぁっ!?!♡ だめ、あっ♡ それやだっ、いっしょ、一緒にするの、やあ、あ……っ♡」

ちゅ♡♡ こりゅこりゅ♡
すりゅすりゅすりゅ♡

胸の先端に柔らかく口付けられ、甘やかに舌を這わされる。それと一緒に愛液でとろとろになってしまったおまんこにちゅぷ♡ と指が埋まった。確かめるように何度も指を往復されて、じわりと快感が戻ってくる。

「ずっと、好きやったんやで。篠原はそんな気なさそうやったけど、俺ずっと前から、篠原しか見てへんかった」
「~~~~っ!?! ひ、んん……っ♡ そ、っんあ、あ♡ —— そんな、わけ……っ」

「信じられへんの？　しゃあない奴やな、信じられるまで言うたるわ。好きやで、篠原、ほんま可愛い……」

ぢゅぷ……っ♡

ずぬぬぬ♡　ぬる……っ♡

致死量の甘さを帯びた言葉に頭がついていかない。ぬかるんだナカに指を埋められて、ゆっくりと奥へと進まれる。

自分でもめったに触ることのない場所に触れられるのが少し怖くてビクつくのと、すぐに止まって安心させるよう胸へとキスが落ちてきた。

「くくうっ♡　ん、ううっ、や……っ！」

「身体ビクッてしたな、痛かったん？　ごめんな」

「ちがつ……う、けど、——こ、こんなの久々だし……っナカ、怖い……っ！」

「怖いん？　……ここは？　この、浅いところ。篠原の……いい好きなクリの、裏側んところ……」

こりゅ♡　こりゅこりゅ♡

ぬりゅぬりゅぬりゅっ♡

お腹側の、ざらざらしたところを指腹で擦られて腰が浮く。

大学時代の元彼に指を入れた時はただただ痛くて怖かったのに、西浦の指はなぜだかちっとも痛くない。

私の反応を追うようにじっと見つめながら、こちゅこちゅ♡ と何度も優しく擦られて知らない快感が背筋に這い寄ってくる。

「ひ、ん、んんっ、〜〜っうあ、あ、あっ……♡」

「ああ、ここは気持ちええんや？ 甘い声出して、かわええなあ……」

「んっ、うう……あ、ああっ♡ やっ、なに、これ……しらない……っ♡」

「ここ触られたことないん？ 俺が初めて？」

くりくり♡ こすこす♡

とちゅとちゅとちゅっ♡

もう片手でクリトリスも撫でられながら、ナカの弱いところを何度も擦られて内腿がびくびくと震える。さっきみたいに、また気持ちいいいっぱいになってきて、難しいこと

が考えられなくなっていく。

「あつ、あつ、うう……っ♡ は、はじめて、じゃないっ、けどお♡ 前は、い、いたかったし……!」

「痛かったん？ こんな感じやすくて可愛ええんに、かわいそになあ……塗り替えたるわ、俺が。ここ、痛ない？」

「ん、ん……いたく、ない……っんうう♡ うあ、くっ♡ 西浦っ、くりやだっ、だめ、だめえ♡」

「なんでや、痛ないやろ？ クリの先っぽとナカ、一緒にされるの気持ちよおない？」

「ひ、あつ、ああっ♡ ちが……っ、くきもち、いいから、だめえ……っ♡」

こりゅこりゅこりゅ♡

とちゅとちゅとちゅ♡

愛液でとろとろの指先で先っぽをなでなで♡ されながら、すっかり把握されてしまったGスポットをあやすようにとんとん♡ されて、もう、甘えたひどい声しか出すことができない。

（うう……っなんでコイツ、こんな器用なの……っ♡ さっき、いったばっか、なのに♡
ずっとそこばっかされるの、むり♡ きもちいい♡ ナカでイったこと、ないのにっ♡
またいきそ……っあ？ なに、そんな、眉寄せて、人の顔じっと、見て——）

——ちゅ……っ♡

驚くほど熱い唇が、自分の唇と重なった。状況を理解する前にゆるゆると擦られて、ずくん、と腰に熱がたまる。

「んむ、う……っ！？ つふ、ん、ん……っ！♡」

「……っは、好き……好きや、篠原、もっともっと、気持ち良くておかしなるとこ、見せてや……っ」

こりゅこりゅ♡ すりすり♡

ちゅう……っ♡

何か言いたくてもまたすぐ唇が降ってきて何も言えない。そのままずっと弱いところを

撫でられ続ける。

酸欠で頭がぼーっとして、気持ちいいことしかわからなくなっていく。堪えるのが難しく、腰がひく♡ ひく♡ と、浮いていく。

「っふ、う、っん、ゝゝっにし、んんっ、西浦あ♡ ま、わた、私っ、また、イっちゃぐ……っ♡」

「ふ……いきそうなん教えてくれるん、可愛すぎやろ。ええよ、キスしながらイってや」
「んむっ、ううっ♡ やっ、あっ♡ ら……め、いく、イ……っんう、うっゝゝゝっっ♡♡」

びく♡ びくびくっ♡ しょわわっ♡

ちよろちよろ……♡♡

キスされたまま、ナカをずっとちゅこちゅ♡ されて、私はまた、あっけなくイってしまった。

お尻のところが自分の出した潮で濡れてきてしまっって早く拭かなきゃって思うのに、震える身体が言うことを聞かない。

力強く抱き締めてくる西浦に凭れて荒い呼吸を繰り返した。

「篠原……篠原、キスしながらいったやんな？　潮まで吹いて……あゝもう、ほんま、かわええ……」

「は……ふ……にし、うら」

さすさすと背中を撫でられて少し落ち着いてくる。

愛おしげに見つめる視線をぼんやりと見返していると、ごくりと唾の飲み込む音がしてきて、また顔が近付いてきた。

また、キスされる——そう思って、力の入らない手でその口を覆う。

「んぐっ……ひのはら？」

「……あんたね……」

「ん？」

「いい加減に、しなさいよ……っ！！」

「あだっ!？」

私は。

ふざけんな、という想いを込めて、ベッドボードに背を預け、今かけられる精一杯の力で、西浦の肩を蹴飛ばした。

西浦の体は数センチしか動かなかったけれど、私が本気で怒っているのは伝わったらしい。大きな目を丸くしている。

「適当な事ばっか言って、キスまでして……！ 私が本気になったらどうすんの！？」

「……？ 篠原、俺はずっと」

「ふざけんなっ、私、私はね、」

——思い出したくなかった。

あのとき必死に諦めて、忘れていたはずのに。

なんでこんな思いを、二度もしなければならぬのだろうか。

「あんたが、私のこと」一番ない”って言ってたの、知ってるんだから……っ！！」

声が震える。

西浦は驚いたように目を丸くしていた。

（ああもうっ、絶対言わないつもりでいたのに……！）

もう、早くここからいなくなりたい。

近くのタオルを掴んで、汗ばんで濡れた身体を拭く。散らばった服をかき集めて、スラックスにどうにか足を押し込んでいく。

「篠原？——篠原、俺言うてへんで、そんな事」

「あっそ、覚えてないんだ？ まあ、数年前だしね。ただの雑談だったよね、西浦にとっては」

「ちやう、言うてへんて、篠原、なあ」

「そうだよね、あんたにとっては些細なことだったんだよね。今のこれも、そうなんですよ？ だったらせめて勘違いさせないようにやんなさいよ」

シャツのボタンを閉める。広いリビングに放り出していたカバンを拾って、上着を羽織る。

テーブルに置いていたスマホを取った瞬間だった。追いかけてきた西浦に腕を掴まれた。

「篠原、待ってや、話を」

「――触ったら、口聞かないって、言った!」

振り払って、ドアから飛び出す。

今すぐにでも泣き出しそうなのに、話なんてできるわけではない。

追いかけてくる気配がしたから、逃げるようにエレベーターに乗り込んで、扉を閉じた。

――せっかく、忘れてたのに。

あの時の声が、頭の中で木霊する。

数年前のことだ。

壁の薄い会議室の廊下を歩いている時に、たまたま聞いてしまった。西浦が上司から話しかけられていたところを。

「どうだ西浦は、お前はアレだ、篠原なんか、同期みたいに仲も良くて。相手にはちょうどいいんじゃないか？」

「んはは！ いやあ、篠原は一番ないっすわ！」

うんざりする。

何が可愛いだ。何が好きだ。

あんなこと言ってたくせに、適当なことばかり。

それなのに、あの一瞬——好きだと言われて喜んでしまっていた自分に一番、うんざりする。